茨城県東南部の方言について

△云野　由紀恵

はじめに

茨城県東南部は、昭和十二年から十四年にかけて行われた金田一春彦氏の調査により、その地域の言葉のアクセントが県内の他の地域と異なり、東京式アクセント[1]であることがわかっている。また、県内の他の地域がアクセントの型の区別のない一型アクセント[2]であることから、この東南部にはアクセントの境界線が存在することもその調査結果を示した地図より窺うことができる。

この調査結果に筆者は、茨城県東南部の出身であることもあって興味を持ち、卒業論文では現在のアクセント分布の調査をし、金田一氏の調査との比較を行った。本稿はその卒業論文をもとに、不十分だった点に手を加えて書き直したものである。

※（1）（2）「日本語方言の研究」（参考文献参照）では、それぞれ「京浜系アクセント」「東北系アクセント」と呼んでいる。

一　金田一氏の研究の概要

（一）調査及び方法

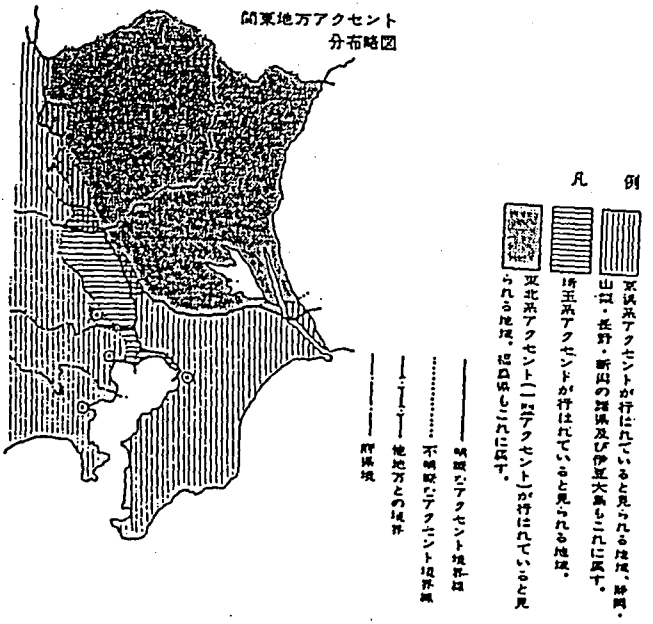
金田一氏が行った調査は、上でも述べたように昭和十二年から十四年にかけて行われ、インフォーマント（被調査者）は当時の高等小学校の高等科の生徒を中心としている（その後、同地方出身の先生や、町中で出会った一般の大人の人についても調査を行っている）。調査語彙は、単音節名詞十八語、二音節名詞七十七語、三音節名詞四十三語、二音節動詞二十九語、三音節動詞三十三語、二音節形容詞二語、三音節形容詞十二語で、調査方法は、調査者の質問に対し答えを求めるという、言わば言わせる調査と、調査語彙の書かれたリストを順次読み上げてもらう、言わば読ませる調査の二種類の方法で行っている。

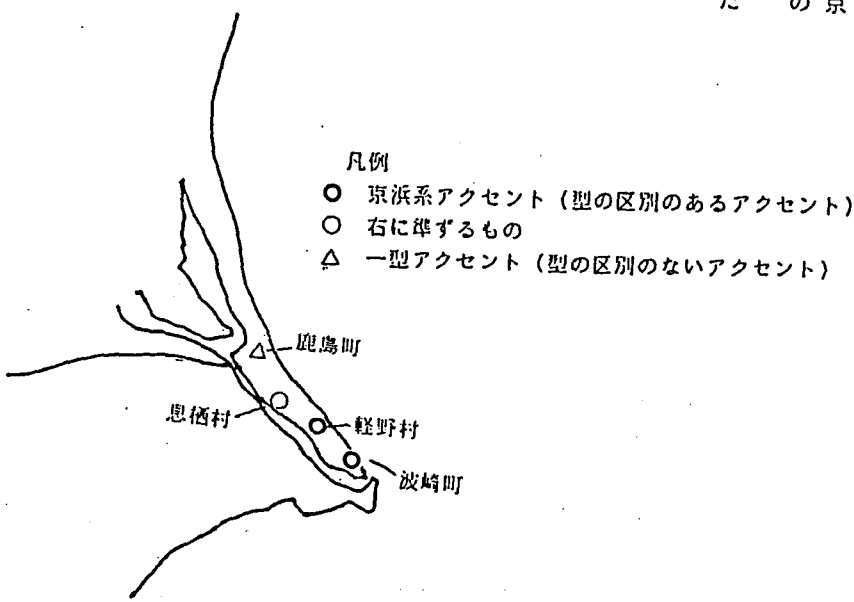
（二）調査の結果

この調査の結果、茨城県内において東南部に限り、東京式アクセントが見られることが明らかになった。具体的には、東京式アクセントであるのは波崎町（はさきまち）と軽野村（かるのむら：現在神栖町（かみすまち））で、軽野村に隣接する息栖村（いきすむら：現在神栖町）については、同じ所に住む人々のアクセントが非常

にまちまちだったことから「型の区別の稍々不明瞭な京浜系アクセント」、またそれ以北は、アクセントの型の区別のない一型アクセントとなっている。

以上結果については、左図及び下図を参照して頂きたい。（いずれも前掲の著書より）





二　本研究について

本研究では、臨地調査で得られたデータをもとに市・町ごとのアクセントの実態を調べる。その調査結果より波崎町・神栖町・鹿嶋市各地域のアクセントの分布状況を探り、金田一氏の調査と比較する方法をとった。

（一）調査方法

選定した語をもとに単語カードを作成し、それを順次読み上げてもらう方法をとった。調査の正確さを高めるためには、発話は二回もしくは三回行うべきだったが、繰り返し発話を求めることは、高齢者には大儀である様子が窺えたので、やむを得ず一回とした。ただし、聞き取りにくい場合や、インフォーマント自身がその発話に迷いがあるように見受けられた場合などには、その都度繰り返し発話してもらった。調査の記録はその場で書き留めるだけでなく、インフォーマントに許可を頂いたうえで、テープレコーダーでの録音も同時に行い、その後カセットテープで聞き取りの確認をした。

（二）調査語彙

調査語彙は、一拍語から三拍語までの名詞九十四語、及び形容詞十八語、動詞四十七語であるが、形容詞・動詞ついてはカセットテープからの聞き取りしかできなかったので、本調査では、名詞を中心として調査・分析を進め、形容詞・動詞のデータは参考までに留めた。

調査語彙、並びに調査で用いた単語カードを一覧にし調査票は、それぞれ表1・表2に示すとおりである。

（三）インフォーマントについて

本調査では、六十歳以上でその市・町で生まれ育った人、もしくは外住歴が五年位までの人で、言語形成期をその市・町で送った人を対象とした。幸いにも、生まれてから今までの間、現在住んでいる地区でずっと暮らしてきた人に多く出会うことができた。インフォーマントは、まず市役所や町役場に問い合わせをして、調査の条件に合うようなお年寄りが集まる、行事や場所を教えてもらい公園やゲートボールのできる空き地、また市・町の総合福祉センターや町主催のゲートボール大会、そして時には市主催の敬老会にもお邪魔して確保する方法をとった。これは事前の予備調査の時に、インフォーマントとなりそうなお年寄りに思うように出会えなかったことや直接家を訪問する、いわゆる「飛び込み調査」をしようとした際に、門前払いされてしまったことがあったことなどから、自力でインフォーマントを求めるのは困難だと痛感したからである。

調査者リストは表3に示した。

（四）調査地について

調査地について、「茨城県市町村概況」より抜粋、要約する。（図1の地図を参照して頂きたい。）

波崎町は茨城県の最東南端に位置し、東北は太平洋に面し、南西は千葉県銚子市に相対し、土地は概ね平坦で

＜表 1＞

	型	アクセント	語彙
一拍語	平板型	○、○▽|	蚊、日、血、葉、戸、実、毛、子、名
	頭高型	○、○|▽	手、酢、矢、火、目、歯、湯、絵、根、木、穂
二拍語	平板型	○○|、○○|▽	鳥、鼻、口、柿、星、霧、姉、飴、水、箱
	尾高型	○○|、○○|▽	橋、山、石、花、歌、川、耳、雪、足、旗、米、音、櫛、紙、夏髪、町、靴
	頭高型	○|○、○|○▽	肩、雨、糸、蜘蛛、雲、箸、猿、針、春、息、朝、帯、鶴、松、汗、綱、稲、窓、声、空、桶
三拍語	平板型	○○○、○○○|▽	着物、薬、机、桜、苺、手紙、畑、車、とかげ、大人、鰯
	尾高型	○○○、○○○|▽	小豆、力、頭、鏡、話、男
	中高型	○○|○、○○|○▽	団扇、米屋
	頭高型	○|○○、○|○○▽	涙、鳥、朝日、命、眼鏡、野原

※「▽」助詞、「○|」（サイドライン）はアクセントの山を示す

＞

2

一．鳥、鳥が鳴く
二．橋、橋がかかる
三．山、山が見える
四．肩、肩がこる
五．雨、雨が降る
六．鼻、鼻が高い
七．石、石がころがる
八．花、花が咲く
九．糸、糸が切れる
十．蜘蛛、蜘蛛がいる
十一．口、口が大きい
十二．歌、歌がきこえる
十三．雲、雲が流れる
十四．箸、箸がおれる
十五．猿、猿がいる
十六．柿、柿がなる
十七．川、川が流れる
十八．耳、耳が大きい
十九．針、針がささる
二十．春、春がくる
二十一．星、星が見える
二十二．雪、雪が降る
二十三．足、足がつかれる
二十四．息、息が苦しい
二十五．朝、朝がくる
二十六．霧、霧がかかる
二十七．旗、旗があがる
二十八．米、米がとれる
二十九．帯、帯がほどける
三十．鶴、鶴が鳴く
三十一．姉、姉がくる
三十二．音、音がきこえる
三十三．櫛、櫛がなくなる
三十四．松、松がある
三十五．汗、汗がでる
三十六．飴、飴がほしい
三十七．紙、紙がやぶれる
三十八．綱、綱がきれる
三十九．稲、稲が育つ
四十．窓、窓が大きい
四十一．水、水が冷たい
四十二．夏、夏がくる
四十三．髪、髪がのびる
四十四．声、声がきこえる
四十五．箱、箱がみつかる
四十六．町、町が大きい
四十七．靴、靴が汚れる
四十八．空、空が青い
四十九．桶、桶がある
五十．着物、着物が似合う
五十一．小豆、小豆がおいしい
五十二．力、力が強い
五十三．頭、頭が良い
五十四．涙、涙がでる
五十五．鳥、鳥が鳴く
五十六．薬、薬が足りない
五十七．机、机が大きい
五十八．桜、桜が咲く
五十九．鏡、鏡がわれる
六十．朝日、朝日が美しい
六十一．苺、苺がとれる
六十二．手紙、手紙が届く
六十三．話、話が楽しい
六十四．命、命が長い
六十五．団扇、団扇がほしい
六十六．眼鏡、眼鏡がほしい
六十七．米屋、米屋が遠い
六十八．畑、畑が荒れる
六十九．野原、野原が見える
七十．車、車が走る
七十一．とかげ、とかげがいる
七十二．男、男がいる
七十三．大人、大人がおこる
七十四．鰯、鰯がとれる
七十五．蚊、蚊がとぶ
七十六．日、日が沈む
七十七．手、手が小さい
七十八．血、血が出る
七十九．葉、葉がしげる
八十．酢、酢が多い
八十一．戸、戸がひらく
八十二．矢、矢がとぶ
八十三．火、火がつく
八十四．実、実がなる
八十五．目、目が悪い
八十六．毛、毛がぬける
八十九．歯、歯がいたむ
九十．湯、湯がこぼれる
九十一．絵、絵がかける
九十二．名、名がうれる
九十三．木、木が育つ
九十四．穂、穂がある

＜表

＜表３＞調査者リスト

市町名	氏名／性別	生年月日	出身
波崎町	①北村ツル／女	大・5	東町
	②石島登美／〃	〃・6	〃
	③小林ハツ／〃	〃・7	〃
	④林よし／〃	〃・1 4	西明神
	⑤長谷川マン／〃	〃・1 4	舎利浜
	⑥永井透男／	〃・7	矢田部
	⑦大内せい／女	〃・9	西松下
	⑧石毛金子／〃	〃・1 1	中須田
神栖町	①石井シツ／女／〃	昭・2	日川浜
	②野口千鶴子／〃	〃・4	横瀬
	③野口キヨ／〃	大・9	萩原
	④井口雄／男	〃・1 2	知手中央
	⑤宮本末ツ／女	〃・8	石神
	⑥沼田セ里／男	〃・1 2	溝口
	⑦猿田千永子／女	〃・9	高浜
	⑧宮川三郎／男	〃・9	深芝
	⑨野口成治／〃	〃・1 3	〃
	⑩米川茂夫／〃	〃・2	居切
	⑪石津すえ／女	〃・7	下幡木
	⑫坂武雄／男	昭・1 0	鰐川
鹿嶋市	①小川しすよ／女	大・5	滝浜
	②橋本子／〃	〃・1 1	木生
	③飯島十郎／〃	昭・2	粟田
	④猿田源／男	大・2	佐生
	⑤秋葉ます／女	〃・1 4	粟井津
	⑥大川さい子／〃	〃・7	平船
	⑦笹本みち／〃	〃・9	大〃
	⑧君田正輔／男	〃・6	爪木中
	⑨大吉か／女	〃・9	宮〃
	⑩鹿島枝／〃	大・1 5	

※ らのでか中の町図も崎地じ波、同をでと点の号地も番査た査調べ調は並の号に6番順らのうかでか4ま向表⑫にびら市及か嶋号る①鹿番あ

年間平均気温は十五度と恵まれている。東部地域には新漁港を中心とした漁業、それに商業が集積し、西部地域は農業が主となっている。

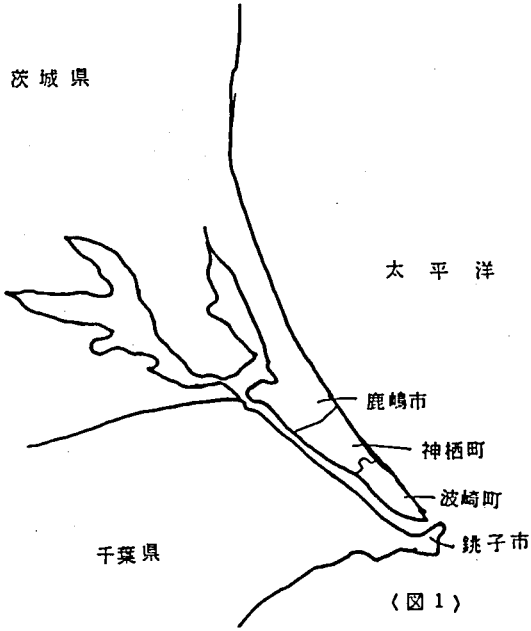
神栖町は昭和三十年に息栖村と軽野村が合体、その後三十一年に若松村横瀬の一部が編入されて今日に至る。利根川沿いの地域には水田も見られるが、現在、農業中心の町から工業と都市近郊型農業の町へと変身を遂げつつある。

鹿嶋市は平成七年に鹿島町と大野村が合体、市としてはまだ歩み始めたばかりの新しい都市である。本調査で筆者が出向いた地域は旧鹿島町で、そこは主に水田が広がっているが、東の砂土壌地帯は鹿島臨海工業地帯の一部になっている。

これらの地域の、言葉についての事前の印象は、①波崎町から北へ向かうにしたがって、言葉の語尾が上がるいわゆる「尻上り」と言われる特徴が顕著に現れるということ、②しかし波崎町に関しては、言葉の調子に少々荒々しい面はあるが、そういった特徴は見られない、などであった。

三　調査結果・・・各地域のアクセント相・・・

ここでは調査で得られたデータをもとに代表例をあげながら、各地域のアクセントについて解説していくことにする。ただし紙面の都合上、代表例が少なくなってしまうことをお許し頂きたい。なお、代表例としてあげた表4から6は、インフォーマントが〈表1〉のアクセントの型別に分けた調査語彙をどのように発話したかを示したものであり、左側の「平板型」「頭高型」などといった型の区別は、表1同様、共通語における型の区別を表している。



〈図1〉

（ア）波崎町のアクセント

ここでは、舎利浜出身の女性から得られたデータを代表としてあげる（表４）。

表４から、波崎町のアクセントは型の区別が明瞭で、金田一氏が述べているように東京式アクセントであると判断できる。他のインフォーマントのデータも、この表と大きな違いは見られなかった。ただ、「５４．涙」「６１．苺」「６４．命」の三語にそれぞれ二種類もしくは三種類のアクセントのパターンが見られるが（表４参照）、その割合からみても、目立ってアクセントの異なるインフォーマントは見られない。実際、この町のインフォーマントのアクセントは、かなり聞き取りやすかった。

＜発話の割合＞

涙	ナミダ	３７．５％	
	ナミダ	〃	
	ナミダ	２５％	
苺	イチゴ	７５％	
	イチゴ	２５％	
命	イノチ	７５％	
	イノチ	２５％	

（イ）神栖町のアクセント

ここでは主に５地点のデータをもとに考察を進めていく。５つの地点は次のとおり。

・横瀬　　地図中の番号：神栖町２
・溝口　　〃　〃　〃　〃　６
・深芝　　〃　〃　〃　〃　８・９
・石神　　〃　〃　〃　〃　５
・下幡木　〃　〃　〃　〃　１１

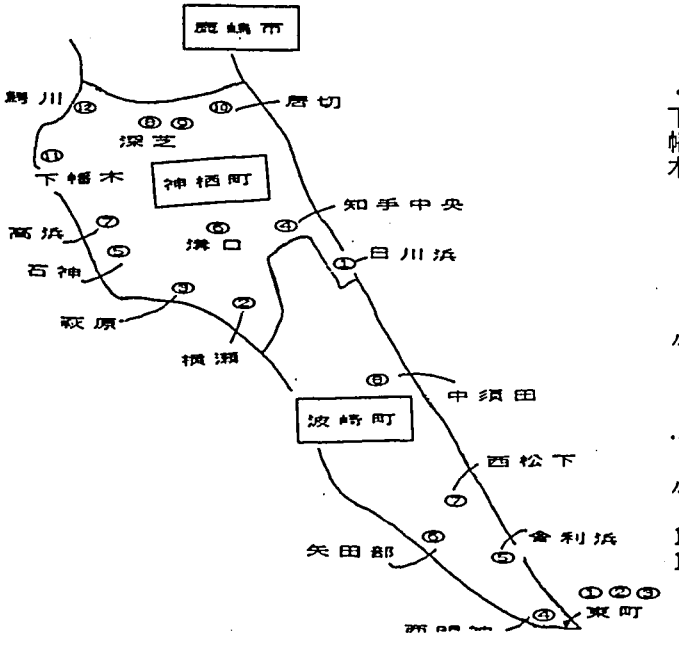


表4．波崎町のアクセント（大正14年生・女）　出身地／舎利浜　調査番号：波－5

平板型	蚊	カ	カ[ガ]	目	ヒ	ヒ[ガ]	血	チ	チ[ガ]	葉	ハ	ハ[ガ]
	戸	ト	ト[ガ]	実	ミ	ミ[ガ]	毛	ケ	ケ[ガ]	子	コ	コ[ガ]
	名	ナ	ナ[ガ]									
頭高型	手	テ	テ[ガ]	酢	ス	ス[ガ]	矢	ヤ	ヤ[ガ]	火	ヒ	ヒ[ガ]
	目	メ	メ[ガ]	歯	ハ	ハ[ガ]	湯	ユ	ユ[ガ]	絵	エ	エ[ガ]
	根	ネ	ネ[ガ]	木	キ	キ[ガ]	穂	ホ	ホ[ガ]			
平板型	鳥	トリ	トリ[ガ]	鼻	ハナ	ハナ[ガ]	口	クチ	クチ[ガ]	柿	カキ	カキ[ガ]
	星	ホシ	ホシ[ガ]	霧	キリ	キリ[ガ]	姉	アネ	アネ[ガ]	飴	アメ	アメ[ガ]
	水	ミズ	ミズ[ガ]	箱	ハコ	ハコ[ガ]						
尾高型	橋	ハシ	ハシ[ガ]	山	ヤマ	ヤマ[ガ]	石	イシ	イシ[ガ]	花	ハナ	ハナ[ガ]
	歌	ウタ	ウタ[ガ]	川	カワ	カワ[ガ]	耳	ミミ	ミミ[ガ]	雪	ユキ	ユキ[ガ]
	足	アシ	アシ[ガ]	旗	ハタ	ハタ[ガ]	米	コメ	コメ[ガ]	音	オト	オト[ガ]
	櫛	クシ	クシ[ガ]	紙	カミ	カミ[ガ]	夏	ナツ	ナツ[ガ]	髪	カミ	カミ[ガ]
	町	マチ	マチ[ガ]	靴	クツ	クツ[ガ]						
頭高型	肩	カク	カク[ガ]	雨	アメ	アメ[ガ]	糸	イト	イト[ガ]	蜘蛛	クモ	クモ[ガ]
	蟹	クモ	クモ[ガ]	箸	ハシ	ハシ[ガ]	狼	オオカミ	オオカミ[ガ]	針	ハリ	ハリ[ガ]
	春	ハル	ハル[ガ]	息	イキ	イキ[ガ]	朝	アサ	アサ[ガ]	帯	オビ	オビ[ガ]
	鶴	ツル	ツル[ガ]	松	マツ	マツ[ガ]	汗	アセ	アセ[ガ]	綱	ツナ	ツナ[ガ]
	稲	イネ	イネ[ガ]	窓	マド	マド[ガ]	声	コエ	コエ[ガ]	空	ソラ	ソラ[ガ]
	櫛	オケ	オケ[ガ]									
平板型	着物	キモノ	キモノ[ガ]	薬	クスリ	クスリ[ガ]	机	ツクエ	ツクエ[ガ]	桜	サクラ	サクラ[ガ]
	苺	イチゴ	イチゴ[ガ]	手紙	テガミ	テガミ[ガ]	畑	ハタケ	ハタケ[ガ]	車	クルマ	クルマ[ガ]
	とかげ	トカゲ	トカゲ[ガ]	大人	オトナ	オトナ[ガ]	鰯	イワシ	イワシ[ガ]			
尾高型	小豆	オマメ	アズキ[ガ]	力	チカラ	チカラ[ガ]	頭	アタマ	アタマ[ガ]	鏡	カガミ	カガミ[ガ]
	話	ハナシ	ハナシ[ガ]	男	オトコ	オトコ[ガ]						
中高型	団扇	ウチワ	ウチワ[ガ]	米屋	コメヤ	コメヤ[ガ]						
頭高型	涙	ナミダ	ナミダ[ガ]	鳥	カラス	カラス[ガ]	朝日	アサヒ	アサヒ[ガ]	命	イノチ	イノチ[ガ]
	眼鏡	メガネ	メガネ[ガ]	野原	ノハラ	ノハラ[ガ]						

まず横瀬地区だが、この地区のデータと、表4の波崎町のデータとを比較すると、異なる点は「涙」のアクセントが「ナミダ」に、「団扇」のアクセントが「ウチワ」になるといったことのみであった。しかし「涙」には同様のアクセントが波崎町のインフォーマント（調査番号4・6・7）にも見られたので、この地区の特徴とは言えない。これ以外は、はっきりとした型の区別もあるので、波崎町同様東京式アクセントであると言える。

次に溝口地区についてであるが、ここでも三拍語の一部を除いたほとんどの語について、型の区別が明瞭であるのが確認できた。その三拍語とは「涙」「朝日」「団扇」「野原」の四語で、それぞれ「ナミダ」「アサヒ」「ウチワ」「ノハラ」というアクセントであった。調査語彙の数が限られているから一概には言えないが、鹿嶋市に近くなる分だけ型の区別の不明瞭なアクセントが少し多く見られると言えるだろう。

溝口よりもさらに鹿嶋市に近い、深芝地区ではどうだろう。

深芝のデータでは、横瀬・溝口よりも型の区別が不明瞭になっているようである。特にそれは二拍語に多く見られた。具体的には「鳥」が「トリ」、「水」が「ミズ」に、「旗が」が「ハタガ」となっており、合計九語についてアクセントの崩れが見られる。さらに三拍語では、「涙」「朝日」「団扇」「野原」の四語について溝口と同じデータが得られ、また「命」については「イノチ」というアクセントであった。一拍語についても若干ではあるが、「日」「子」に助詞を付けた場合にそれぞれ「ヒガ」「コガ」といったアクセントの崩れが見られた。この結果より考えられるのは、この深芝のあたりにアクセントの境界線があるのではないかということである。しかし、この調査結果だけでアクセント相を判断するのは難しい。そこで同じく深芝出身の男性（調査番号9）のデータについて考察していく。

この男性のデータで目立って東京式アクセントと異なるのは、一拍語と二拍語の平板型の語彙で、一拍語では「日」「血」「葉」「子」「名」がそれぞれ「○▽」というアクセントに、二拍語では「鳥」「柿」が、単独では平板型「○○」というアクセントであったが、「が」を付けた場合には「○○▽」というアクセントになった。これに対して尾高型に分類される「旗」については、「ハタ」「ハタガ」というように平板型と思われる発話であった。次いで三拍語の中で崩れが見られたのは「涙」「朝日」「苺」「団扇」の四語だけであった。これら以外はほぼ型の区別があったわけだが、先程あげたもう一つの深芝の結果と比べると、アクセントの曖昧な語彙、型の区別の不明瞭な語彙が少なくなっている。しかし、これにはインフォーマントの個人的差異（職業・経験・年齢等）ということも考えられる（調査番号9のインフ

ォーマントは昭和十三年から十八年にかけて東京に住んでいたことがある）。よって深芝については、二つの調査結果を統合して考えると、準東京式アクセントとも言うべきアクセント相であるという結論に至った。

最後に、石神・下幡木地区について考察していく。

この二つの地区は、どちらも利根川沿いに位置し、古くからの農村地帯が広がる地域である。地元の人の話の中から神栖町の中でも町の中心部に比べて、古くからのアクセントの残存率が高いだろうと考えられた。

まず石神地区についてだが、目立ってアクセントの型の区別がないと思われたのは、二拍語の中の五語（「鳥」「口」「飴」「歌」「箸」）と三拍語の三語（「涙」「命」「団扇」）であった。例えば「鳥」「口」「歌」「箸」は助詞が付けば（東京式アクセントではないが）アクセントの山は一応あるが、単独の場合にはアクセントの山がなく、「トリ」「クチ」といったアクセントであった。また逆に「飴」は、単独の場合には「アメ」というアクセントに、そして助詞が付くとアクセントの山がないといった興味深い結果となった。しかしこれらの語彙を除いては、型の区別も明瞭であることから東京式アクセントと言ってよいと考える。調査の際も深芝の時のような聞き取りにくさはほとんどなかった。一方、下幡木地区は、結果から述べると、一拍語の頭高型の語彙を除いてほとんど型の区別がなかった。そのデータを表5に示したので見て頂きたい。先程の石神地区において述べた調査結果とは、全く異なる結果であることが一目瞭然である。同じ旧息栖村である深芝での調査結果とも異なるアクセント相であることがわかる。

（ウ）鹿嶋市のアクセント

ここでは木滝地区のデータを表6にあげながら、三つの調査地点について考察していくことにする。

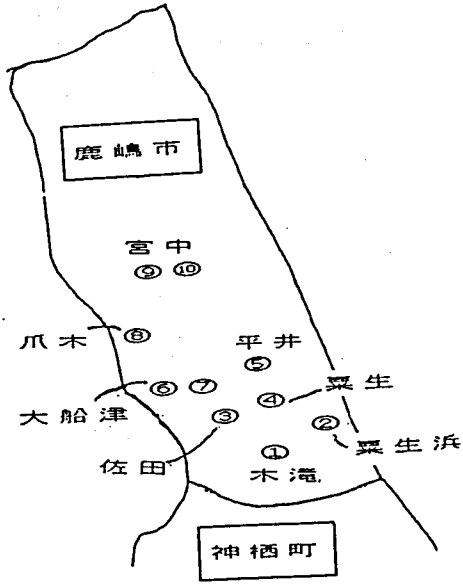


表5．神栖町のアクセント（大正7年生・女）　　出身地／下幡木　　調査番号：神－11

平板型	蚊	カ	カガ	口	ヒ	ヒガ	血	チ	チガ	葉	ハ	ハガ
	戸	ト	トガ	実	ミ	ミガ	毛	ケ	ケガ	子	コ	コガ
	名	ナ	ナガ									
頭高型	手	テ	テガ	酢	ス	スガ	矢	ヤ	ヤガ	火	ヒ	ヒガ
	目	メ	メガ	歯	ハ	ハガ	湯	ユ	ユガ	絵	エ	エガ
	根	ネ	ネガ	木	キ	キガ	穂	ホ	ホガ			
平板型	鳥	トリ	トリガ	鼻	ハナ	ハナガ	口	クチ	クチガ	柿	カキ	カキガ
	星	ホシ	ホシガ	霧	キリ	キリガ	姉	アネ	アネガ	飴	アメ	アメガ
	水	ミズ	ミズガ	箱	ハコ	ハコガ						
尾高型	橋	ハシ	ハシガ	山	ヤマ	ヤマガ	石	イシ	イシガ	花	ハナ	ハナガ
	歌	ウタ	ウタガ	川	カワ	カワガ	耳	ミミ	ミミガ	雪	ユキ	ユキガ
	足	アシ	アシガ	旗	ハタ	ハタガ	米	コメ	コメガ	音	オト	オトガ
	櫛	クシ	クシガ	紙	カミ	カミガ	夏	ナツ	ナツガ	髪	カミ	カミガ
	町	マチ	マチガ	靴	クツ	クツガ						
頭高型	肩	カタ	カタガ	雨	アメ	アメガ	糸	イト	イトガ	蜘蛛	クモ	クモガ
	雲	クモ	クモガ	箸	ハシ	ハシガ	狼	オオカミ	オオカミガ	針	ハリ	ハリガ
	春	ハル	ハルガ	息	イキ	イキガ	朝	アサ	アサガ	帯	オビ	オビガ
	鶴	ツル	ツルガ	松	マツ	マツガ	汗	アセ	アセガ	綱	ツナ	ツナガ
	稲	イネ	イネガ	窓	マド	マドガ	声	コエ	コエガ	空	ソラ	ソラガ
	桶	オケ	オケガ									
平板型	着物	キモノ	キモノガ	薬	クスリ	クスリガ	机	ツクエ	ツクエガ	桜	サクラ	サクラガ
	苺	イチゴ	イチゴガ	手紙	テガミ	テガミガ	畑	ハタケ	ハタケガ	車	クルマ	クルマガ
	とかげ	トカゲ	トカゲガ	大人	オトナ	オトナガ	蝶	チョウ	チョウガ			
尾高型	小豆	アズキ	アズキガ	力	チカラ	チカラガ	頭	アタマ	アタマガ	鏡	カガミ	カガミガ
	話	ハナシ	ハナシガ	男	オトコ	オトコガ						
中高型	団扇	ウチワ	ウチワガ	米屋	コメヤ	コメヤガ						
頭高型	涙	ナミダ	ナミダガ	鳥	トリ	トリガ	朝日	アサヒ	アサヒガ	命	イノチ	イノチガ
	眼鏡	メガネ	メガネガ	野原	ノハラ	ノハラガ						

表6．鹿嶋市のアクセント（大正5年生・女）　　出身地／木滝　　調査番号：鹿－1

平板型	蚊	カ	カガ	口	ヒ	ヒガ	血	チ	チガ	葉	ハ	ハガ
	声	ト	トガ	実	ミ	ミガ	毛	ケ	ケガ	子	コ	コガ
	名	ナ	ナガ									
頭高型	手	テ	テガ	酢	ス	スガ	矢	ヤ	ヤガ	火	ヒ	ヒガ
	目	メ	メガ	歯	ハ	ハガ	湯	ユ	ユガ	絵	エ	エガ
	根	ネ	ネガ	木	キ	キガ	穂	ホ	ホガ			
平板型	鳥	トリ	トリガ	鼎	ハチ	ハチガ	口	クチ	クチガ	柿	カキ	カキガ
	星	ホシ	ホシガ	霧	キリ	キリガ	姉	アネ	アネガ	飴	アメ	アメガ
	水	ミズ	ミズガ	箱	ハコ	ハコガ						
尾高型	橋	ハシ	ハシガ	山	ヤマ	ヤマガ	石	イシ	イシガ	花	ハナ	ハナガ
	歌	ウタ	ウタガ	川	カワ	カワガ	耳	ミミ	ミミガ	雪	ユキ	ユキガ
	足	アシ	アシガ	旗	ハタ	ハタガ	米	コメ	コメガ	音	オト	オトガ
	櫛	クシ	クシガ	紙	カミ	カミガ	夏	ナツ	ナツガ	髪	カミ	カミガ
	町	マチ	マチガ	靴	クツ	クツガ						
頭高型	肩	カタ	カタガ	雨	アメ	アメガ	糸	イト	イトガ	蜘蛛	クモ	クモガ
	雲	クモ	クモガ	箸	ハシ	ハシガ	猿	サル	サルガ	針	ハリ	ハリガ
	春	ハル	ハルガ	息	イキ	イキガ	朝	アサ	アサガ	帯	オビ	オビガ
	鶴	ツル	ツルガ	松	マツ	マツガ	汗	アセ	アセガ	綱	ツナ	ツナガ
	稲	イネ	イネガ	窓	マド	マドガ	声	コエ	コエガ	空	ソラ	ソラガ
	桶	オケ	オケガ									
平板型	着物	キモノ	キモノガ	薬	クスリ	クスリガ	机	ツクエ	ツクエガ	桜	サクラ	サクラガ
	苺	イチゴ	イチゴガ	手紙	テガミ	テガミガ	畑	ハタケ	ハタケガ	車	クルマ	クルマガ
	とかげ	トカゲ	トカゲガ	大人	オトナ	オトナガ	鰯	イワシ	イワシガ			
尾高型	小豆	アズキ	アズキガ	力	チカラ	チカラガ	頭	アタマ	アタマガ	鏡	カガミ	カガミガ
	話	ハナシ	ハナシガ	男	オトコ	オトコガ						
中型	団扇	ウチワ	ウチワガ	米屋	コメヤ	コメヤガ						
頭高型	涙	ナミダ	ナミダガ	鳥	トラス	トラスガ	朝日	アサヒ	アサヒガ	命	イノチ	イノチガ
	眼鏡	メガネ	メガネガ	野原	ノハラ	ノハラガ						

表6を見てもわかるように、木滝地区のアクセントは下幡木を除く神栖町内に比べ、アクセントの型がだいぶ崩れている。型の崩れが見られないのは、一拍語の頭高型のみで、他はいずれの型についても崩れが見られる。

他の地区はどうだろうか。神栖町寄りの粟生浜では、木滝同様、一拍語の頭高型には崩れは見られず、また三拍語の尾高型にも崩れはなかった。さらに三拍語については、木滝においては二十五語中十四語に崩れが見られたのに対し、粟生浜では八語と少なくなっている。この地区においては、鹿嶋市内の他の調査地点に比べると、型の区別はだいぶはっきりしているように見受けられ、聞き取りにくさもそれほど感じられなかった。

次いで利根川沿いの大船津では、木滝・粟生浜と同様、一拍語の頭高型で型の崩れはなかったが、他の型全てに型の区別のないアクセント（東京式アクセントとは全く異なる）が見られた。具体的に言えば、二拍語において、木滝・粟生浜ではほぼ助詞が付いた場合に限って崩れが見られたが、大船津では、助詞の付かない場合にも多くの語に崩れが見られた（四十九語中三十語）。また、三拍語に関しては、他の調査地点ではほとんど崩れが見られなかったが、三拍語の平板型の十一語全てに様々なパターンの型の崩れが見られた。

鹿嶋市内の木滝・粟生浜・大船津以外の他の調査地点においても、語数や型の崩れ方に差はあるものの、同様の結果が得られた。ただ中には、それほど目立った崩れが見られないインフォーマントもいたが、調査番号4のインフォーマントがそれで、その場合、職業や生活環境からの何らかの影響があったものと推察される（この男性は昔、特別高等警察官であったという）。

四　まとめ

以上、茨城県内で他の地域と異なったアクセントと言われる東南部での、一拍語から三拍語の名詞を対象としてその分布状況について見てきた。調査前の予想では、東京式アクセントの分布は神栖町全般、もしくは鹿嶋市内の神栖町よりの地域にも及んでいるのではないか、ということだったが、今回の調査では次のような結果になった。（次頁の図参照）

◆波崎町のアクセントは、金田一氏の調査結果と一致して東京式アクセントである。ただし、今回の調査語彙の中では、二拍語の「涙」「苺」「命」の三語についてのみ、二種類あるいは三種類のアクセントパターンがあることがわかった。

◆神栖町については、横瀬・溝口は波崎町とほぼ同様の結果が出たことから、この二地区についても東京式アクセントと言える。さらに、石神地区においても若干型の不明瞭な語彙があるものの、目立って型の崩れた語彙がないことから、この三地区が属する

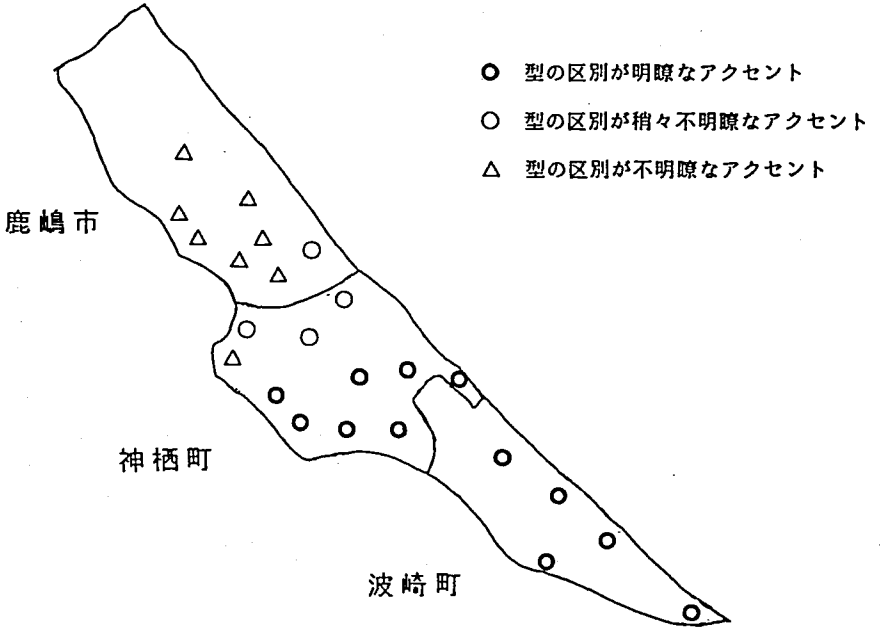
旧軽野村は、金田一氏の調査結果と同じく、東京式アクセントであると判断できる。

一方、旧息栖村は場所により差異が見られる。まず、比較的町の中心部に近い深芝では、一部の語彙にアクセントの崩壊が見られるから、東京式アクセントであるとは言えないが、それに準じるアクセント相である。それに対し下幡木では、型の区別がほとんど見られないアクセントである。このような結果から、金田一氏が述べているように、「型の区別が稍々不明瞭な京浜系アクセント」ではあるが、その程度には差があるのである。

◆鹿嶋市では、粟生浜で他の地区に比べて型の区別のある語彙は若干多かったが、全体的には型の区別のないアクセント相で、金田一氏の調査結果と一致した。また、動詞・形容詞についても、波崎町や神栖町ではほとんど見られなかった崩壊したアクセントであったことも付け加えておく。

最後に、今後の課題について一言触れておきたい。

今回の調査では、単語カード読み上げ法による調査のみであったが、同時に意識調査を行ったら、もっと密度の高いものになっていただろう。また、調査対象に若年層を加えて老年層との比較を加えていたら、アクセントの変遷を辿ることも可能だったかも知れない。筆者には今のところそんな余裕はないが、いつの日かそういった



報告ができることを期待したい。

〈参考文献〉
・金田一春彦「日本語方言の研究」（一九七七年　東京堂出版）
・国立国語研究所「国立国語研究所報告　方言の諸相『日本語言語地図』検証調査報告」（一九八五年　三省堂）
・講座方言学2「方言研究法」（一九八四年　国書刊行会）
・講座方言学5「関東地方の方言」（一九八四年　国書刊行会）
・秋永一枝「利根川下流域のアクセント」（一九六八年　人類科学20）
・塩原慎次郎「日本語アクセントの習得」（一九九五年　近代文藝社）
・波崎町文化財保護審議会編「波崎町のことば」（一九九0年波崎町教育委員会）
・茨城県総務部地方課編「茨城県市町村概況」（一九九二年　茨城県市長会・茨城県町村会・茨城県地方自治体会）
・国語学会編「国語学大辞典」（東京堂出版）

〈参考資料〉
・「曖昧アクセント世代別調査票」（東北大学文学部国語学研究室）
・杉本美代子「福井及び大阪方言話者におけるアクセントの生成、知覚と両者の関連」
・吉田則夫「愛媛県大洲市田口方言の語アクセント」
・追着千恵「鹿島方言の言語変化」（世田谷深沢郵便局）